

聖霊降臨後第4主日特定8（7月2日の聖書箇所）

I 第一朗読（イザヤ2章10―17節）

- 10 岩の間に入り、塵の中に隠れよ
主の恐るべき御顔と、威光の輝きとを避けて。
- 11 その日には、人間の高ぶる目は低くされ
傲慢な者は卑しめられ
主はただひとり、高く上げられる。
- 12 万軍の主の目が臨む
すべて誇る者と傲慢な者に
すべて高ぶる者に――彼らは低くされる――
- 13 高くそびえ立つレバノン杉のすべてに
バシヤンの樅の木の前まで
- 14 高い山、そびえ立つ峰の前まで
- 15 高い塔、堅固な城壁の前まで
- 16 タルシシュの船と美しい小舟の前まで
- 17 その日には、誇る者は卑しめられ
傲慢な者は低くされ
主はただひとり、高く上げられる。

II 第二朗読（ローマの信徒への手紙6章3―11節）

3 それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。4 わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。5 もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9 そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10 キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11 このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

言葉の解説

3 節 ■ 「知らないのですか」。パウロはここで新しい教えを伝えようとしているのか、すでに読者が周知の伝承に訴えようとしているのかは判然としない。次の可能性が考えられるが、②か③がよいだろう。① 読者が考えさえすれば明らかで明らかな教えを述べている。② 既に受け入れられている教え（キリストに結ばれるために）から明らかに推論できる教え（その死にあずかるために）をパウロが導き出した。③ 周知の教えの中で見落とされたり無視されている面にパウロは注目させようとしている。 ■ 「キリスト・イエスに結ばれるために」：その死にあずかるために」。直訳は「キリスト・イエスの中へ…彼の死の中へ」となり、前置詞エイ

ス(の中へ)を繰り返して、キリストの死と関わることの必然性が示されている。4節の「その死にあずかる」も前置詞エイスに導かれた句。

4節■「キリストと共に葬られ」。パウロは接頭辞シユン(共に)で始まる合成動詞を約40種類も用いる。「共に葬る」はシユンサプトー。6節には「共に十字架につけられる(シユスタウルマイ)」、8節には「共に生きる(シユザオー)」が用いられている。

10節■「キリストが…罪に対して死なれた」。キリストは「罪を犯して」死んだのではなく、「罪に關して」死んだ。人が罪の中で生きることができないように、キリストは死んで罪の力を無効にした。

11節■「神に対して生きている」。キリスト者は、自分は罪に対して死者であるとみなが、神に対しては生き続けている。このような生は、「キリストに結ばれて」初めて可能となる。

①今日の朗読は「あなたがたは知らないのですか」という問いかけ(3節)で始まり、「あなたがたは…考えなさい」という呼びかけ(11節)で終わっています。そしてどちらにも「キリスト・イエスに結ばれる」と訳された句があります。この句は原文では前置詞句であり、3節では前置詞エイス(…の中へ)が、また11節では前置詞エン(…の中に)が用いられています。ここでの「あなたがた」が誰であるかは、六1-2から知ることができます。

そこには「では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができよう」とあります。死からの解放をテーマとする5章の結びで、パウロは「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」(20節)と述べていますが、この結論は「恵みが増すようにと罪にとどまったほうがよい」という誤解を引き起こしかねません。そこで、続く6章(今週の朗読)では、それが誤解にすぎないことを示そうとしています。ですから、ここでの「あなたがた」とはこのような誤解に心を引かれた人たちのことです。

4-10節には「あなたがた」は一度も現れません。ここに登場するのは、神とキリストと「わたしたち」です。しかも、この段落には前置詞シユン(…と共に)とそれを含む合成動詞が5回も使われています。

共に葬られる(4節)

一体となる(5節)

共に十字架につけられる(6節)

共に(死んだ)、共に生きる(8節)

パウロがこのような表現を多用するのは、キリスト者であることとしるしは、キリストと「共に」あるということだからです。彼はキリストと「共に葬られ」、キリストと「一体になって」その死にあやかり、キリストと「共に十字架につけられ」、キリストと「共に」死んだのなら、キリストと「共に生きることになる」と信じています。

5回使われる「共に」のうち、4回はキリストの死と関係しています。キリストの死への関与が強調されるのは、ひとつにはそれがキリストと共に生きることにつながるからです。他にも理由があります。それは6-7節にあるように、罪に支配された体が滅ぼされ、罪から解放され、罪の奴隷であることに終止符を打つことになるからです。この死は罪に対する死なのです。

キリストはただ一度死ぬことによって、罪の力を無効にしたのであり、私たちが罪の中に生きることができないようにしたのです(10節)。

ですから、キリストと「共に」あるのは、キリストと共に罪に対して死ぬためであり、またキリストと共に復活にあやかって神に対して生きるためです。そのように「あなたがたも考え

なさい」と11節は命じています。罪の中に生きるのではなく、復活の命を与える神の力で生きる者とされるためには、「キリスト・イエスに結ばれて」ということが必要です。

私たちは洗礼によって「古い自分」を脱ぎ捨て、新しい命に生き始めています。この命は目標に到達したわけではありません。その途上にあります。ですから、パウロは「キリストと共に生きることもなる」と未来形で述べます(8節)。しかし、罪に対してキリストと共に死んだ以上、罪はもはや力を失っています。人の命を支配していた死という力は滅ぼされました。「キリストと共に、キリストに結ばれて」いる者には復活の命が約束されています。これ以上の恵みはありません。ですから、罪にとどまる必要はないのです。

②言葉の広がり。「知らない・アグノエオー」

この動詞は新約聖書に22回用いられますが、そのうち15回はパウロ書簡での用例です。まず、「知らない、認識していない、見分けがつかない」を意味します。パウロ書簡での用例が多いのは「あなたがたが知らないことを私は望まない」という構文であり、「あなたがたにぜひ知っておいて欲しい」を意味します(ローマ13、1コリ11、一二一)。

次に、「知り合いでない、見聞きしたことがない」を意味します。多くの人がイエスを「認めず」(使二三27)、神の義を「知らず」(ロマ13)にいます。パウロはアテネの人が「知らず」に拜んでいるものを宣べ伝えますが(使一七23)、回心の直後、ユダヤの人々とは「顔見知りではありませんでした」(ガラ22)。

また「理解していない」、さらに「間違える、罪を犯す」を意味します。弟子たちはイエスの受難予告の言葉を「分からず」(マコ九32)、大祭司は自分も弱さを持っているので、「無知な人」を思いやることができます(ヘブ五2)。

今日の朗読では、「知らないのですか」と問いかけて、キリストと共に死んで、生きるという恵みに目を向けさせます。

Ⅲ福音(マタイ10章34—42節)

34 「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思つてはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。 35 わたしは敵対させるために来たからである。

人をその父に、

娘を母に、

嫁をしゅうとめに。

36 こうして、自分の家族の者が敵となる。

37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。 38 また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。 39 自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」

40 「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである。 41 預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受け、正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。 42 はっきり言っておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

言葉の解説

37 節 ■ 「ふさわしい」。この形容詞アクオシスは、天秤にかけた二つの物が釣り合うことを表す言葉からの派生語であり、「…に値する」の意味。ここで示されるイメージは、天秤の

片方にイエスを、もう片方に「イエスよりも父母・息子や娘を愛する者」を乗せると、一方が軽すぎて釣り合わない、というようなことである。そこから「イエスに属する者として価値がなく、彼とは異なった生き方をする者」という意味が生じる。

38節 ■「自分の十字架を担う」。「担う」と訳された動詞ラムバノーは、41節では「(報いを)受ける」と訳される。「十字架を担う」ことはイエスに従う弟子の条件である。しかし、マタイはこの動詞によって殉教という十字架よりも、イエスの弟子が受ける報いの大きさに気づかせようとしている。

39節 ■「自分の命を得ようとする者」。「得る」と訳された動詞ヘウリスコーは、元来「見つける」の意味。これは「何かを見つけなければならぬのに、見失って見つからない」状態が前提となる語であり、心傷つき、重荷を負いながらも、安らぎを求めて何かを探し続ける人間存在の本質を表しているだろう(マタ77、11-29 参照)。

40節 ■「受け入れる」。宣教師はイエスのメッセージと人格を彼に代わって表す。宣教師に對するもてなしは、イエスとイエスを遣わした神を迎え入れることに他ならない。従って、宣教師が伝えた言葉を受け入れることは、福音を信じることでもある。

41節 ■「預言者として」。直訳は「預言者の名のために」。名前はその名で呼ばれるものの本質(そのもの自体)を指す。

①今日の福音は、イエスが弟子たちを派遣する際になされた「派遣説教」(15-42)の結びに当たります。この説教は、宣教に出かける弟子たちに対するイエスの励ましのメッセージですが、マタイ福音記者はこのテーマに合うイエスの言葉をさまざまな文脈から選び出し、キアスムス(交差配列法)を用いて次のように再構成しています。

a 派遣される弟子への指示 (5-15節)

b 迫害があるが、恐れるな (16-23節)

c 弟子は師のようになれば十分 (24-25節)

b 迫害があるが、恐れるな (26-33節)

a 派遣される弟子への指示 (34-42節)

中心にある主張(c)は、派遣される弟子と派遣する師は一致しており、弟子は師のようにならない、ということですが。

今日の福音はaの一部分ですが、これをさらに前半(37-39節)と後半(40-42節)に分けることができます。前半部では、「わたしにふさわしくない」という言葉の繰り返しによって、イエスの生き方にふさわしい宣教師の姿が明らかにされます。後半部では、「受け入れる」という言葉が「報い」という言葉に組み合わせて用いられ、宣教師を「受け入れる者」について語られています。

わたしたちは皆、自分の毎日の生活が家族によって支えられていることを知っています。だから父や母、息子や娘を大切にするのは当然のことです。しかしイエスは、家族を「イエスより」愛する人は「ふさわしくない」と言明します。それは「イエスに従わない」ことであり、命への道ではない、と教えます。なぜなら、そこには神の国をもたらしたイエスとの関わりが欠如しているからです。家族への愛を最優先させないのは、十字架を受け取ってイエスの後に従うためです。

十字架という出来事のうちには、命への道が示されています。生きるべき命を見いだし、それを獲得するためには、イエスとの関わりは不可欠です。39節の「自分の命を得ようとする者」とは、イエスとの交わりを持たずに生きようとする人のことです。人が探し求めて見いだすものは、本来、恵みとして与えられたものです。だから逆に「イエスのために」自分の命を失うものは、生きるべき命、すなわち自分自身と自分が愛する者たちを見いだすことができません。イエスは十字架を通して命をもたらす方だからです。

古代社会では、他人を手厚くもてなすことは重要な意味を持っていました。それはヒューマニズムに根拠をおく行為ですが、イエスに派遣された宣教師を受け入れることはそれ以上の意味を持ちます。宣教師をもてなすことはイエスを迎えることであり、神を迎えることです。それは彼がイエスの人格を帯び、そのメッセージを携える者だからです。

従って、その言葉を受け入れることは、福音を信じることに他なりません。宣教師の言葉を聞いて福音を受け入れた者への「報い」の大きさは、宣教師の使命の重大さを浮き彫りにしています。42節の「報いを受ける」という言葉は、直訳では「報いを失わない」となります。この「失う」という語は、39節の「命を失う者」と同じ動詞です。宣教師は、イエスのために命を「失う」ことによって、神からの命を受け継いだ者です。だから、彼を迎え入れる者は、神からの命を「失わない」のです。そのもてなしがたとえ「冷たい水一杯」であっても「報い」が保証されるほどに、宣教師の役割は重要であり、また貴重なものです。その使命は、自分が受けた「命」を全ての人にもたらすことにあります。イエスを信じる私たちも、今日、そのために世に遣わされています。

②言葉の広がり。「報い・ミスソス」

この語は基本的には「労働者に支払われる報酬・賃金」を表します。労働者に「賃金」を支払わない金持ちは神からの厳しい裁きを受けます(ヤコ五4)。

しかし、転義して使われると、「道徳的な行いに対する(神からの)報い」を表します。イエスのために迫害される者には天における「報い」が約束され(マタ五12)、何も当てにせず貸す者には多くの「報い」があります(ルカ六35)。しかし、人前で善行を行う者には天の父のもとでの「報い」はなく(マタ六1)、人に見せるために敬虔に振舞う偽善者はすでに「報い」を受けてしまっています(マタ六2)。

パウロは神の支配がもたらす報いと人間の働きに応じた報酬との区別を明確にするために、この語は後者の意味に限定し、前者の意味での報いを表すためには名詞テイマー(「誉れ」)を用います。

今日の福音では三度も使われますが、未来形の動詞が使われていることから考え、天において神から与えられる「報い」を表しています。